

この校舎で過ごした一夜 忘れない 閑上(ゆりあげ)中学校 解体へ(宮城県名取市)

「宮城県名取市閑上中の校舎が、かさ上げ工事のため、近く取り壊される。津波を逃れた約850人が、凍える一夜をここで過ごした。「忘れられない」という誓いの上に、新しいまちはつくられる。

3月11日は卒業式の日だった。式を終えて成都是帰り、教職員が体育館のいすを片づけていた時、揺れは始まった。尻もちをつく女の先生もいた。まもなく、ワンセグを見ていた一人が、多津波警報を知らせた。

海から1.7キロ。3階建ての学校は避難場所に指定されていた。まちの人が続々集まってきたのは、地震から40分余りたってから。しばらくは校舎に入らず、立ち話を続ける人もいた。

車を誘導しようと、男の先生数人が校庭に出た。2年1組の担任、藤村崇さん(41)は突然、ゴーツという音を聴く。海の方を振り向くと、竜巻を横にしたような黒い砂煙が、数百メートル先に見えた。

「走れ！っ」と叫びながら校舎に駆け込む。建物に何かドン、と当たる振動を感じた。人々は階段に殺到し、「屋根を開けろ！」とパニックになっていた。

まちを覆う黒い水。家、車、船、ガスボンベ、みんな流されていく。

人々は3階の教室に入った。部活のユニホームや給食の白衣が期着替に提供された。毛布が足りず、カーテンを外してくるまった。備蓄倉庫にあった食料は1人2枚のクラッカーだけ。あるはずの飲料水はなかった。

やがて暗闇に包まれた。ポーン、ポーン都爆発音が断続的に聞こえ、遠くで燃え続ける日が見えた。

「助けてくれ！」と叫ぶ声が何度か聞こえた。屋根に取り残された人、ひざまでぬれながら学校をめざして来る人。工藤さんは「大丈夫か！」と返し、懐中電灯の細い光を向けた。たどり着いた人の体を先生たちがさすり、理科室のアルコールランプで湯をわかし、ココアを飲ませた。

カーテンにくるまり、アルコールランプで湯わかした

3月12日。長い長い夜が明けた。

後者は避難所には使えず、人々は夜までに別の学校などに移った。先生たちは、あちこちの避難所で成都を探した。約1週間後、2年2組の男子生徒の遺体が見つかった、と最初の連絡が入る。

家で親と自身の後片づけをしていたり、中学校に逃げる途中で津波にのまれたり。14人の生徒が犠牲になった。閑あげ地区全体では、750人余りが亡くなった。

藤村先生は、撮りためていた学校行事の写真から、生徒が写ったものを引き伸ばし、遺体安置所に通っては、ひつぎの上に置いて回った。「こんなことのために撮ったんじゃない」と、心の中では泣きながら。「(河北新報)15年11月2日付け)

【秋旨丼 (2,000 円) ーご飯よりも具が多い! (「竜巳や」南三陸町歌津)】

【ふかひれ炒飯 (1,200 円) ーふかひれ丼 (5,000 円以上) は、私には手も足も出ないので (「福建楼」気仙沼市紫市場)】

当時教務主任だった八森伸 (のぼる) さん (53) はその晩、気になっていた。150 人余の全校生徒のうち、学校にいたのは 20~30 人。他の生徒はどこへ? 職員室に飛び込んだ。壁にかかっていた数十本の鍵は、すべて落ちていた。その中から必死で屋上の鍵を探し出す。扉を開ける。上に出る。その瞬間、目にした光景に茫然となった。